

平成31年3月7日

千葉県農林総合研究センター長

## I 向こう1か月間の予報

発生量及び発生時期は平年との比較で表す。また、予報の根拠の(+)は多発要因、(-)は少発要因であることを示している。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
イネ	イネミズゾウムシ	少	2月越冬量：少(-)	<ul style="list-style-type: none"> <li>移植時に苗箱処理剤で薬剤防除する。</li> <li>P4～P5「これから注意を要する病害虫」を参考にする。</li> </ul>
	イネクロカメムシ	やや少	2月越冬量：やや少(-)	
	ヒメトビウンカ	多	2月越冬量：多(+)	<ul style="list-style-type: none"> <li>イネ縞葉枯病ウイルスを媒介する。</li> <li>P4～P5「これから注意を要する病害虫」及びP6「その他の情報」を参考にする。</li> </ul>
	スクミリンゴガイ	多	12～2月の平均気温：やや高(+) 前年6月の発生量：並 前年6月の被害株率：多(+)	
冬春トマト	コナジラミ類	並	3月上旬発生量 オンシツコナジラミ：並 タバココナジラミ：やや多(+) 気象予報：日照時間少(-)	<ul style="list-style-type: none"> <li>施設内外の雑草を除去する。</li> <li>黄色粘着テープなどにより成虫を誘引捕殺する。</li> <li>発生初期から薬剤防除する。</li> <li>同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。</li> </ul>
春キャベツ	菌核病	多	3月上旬発生量：並 気象予報：気温高(+) 降水量並から多(+) 日照時間少(+)	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病株は速やかに抜き取りほ場外に持ち出し、適切に処分する。</li> <li>薬剤防除は、株元まで薬剤が到達するよう、ていねいに行う。</li> </ul>

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
イチゴ	アブラムシ類	やや多	3月上旬発生量：やや多（＋） 2月黄色粘着板誘殺数： やや多（＋） 気象予報：日照時間少（－）	<ul style="list-style-type: none"> <li>発生初期から薬剤防除する。</li> <li>同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。</li> </ul>
	アザミウマ類	やや多	3月上旬発生量：多（＋） 2月黄色粘着板誘殺数：並 気象予報：日照時間少（－）	
	ハダニ類	並	3月上旬発生量：並 気象予報：日照時間少（－）	
野菜共通 （施設）	うどんこ病	やや多	3月上旬発生量 冬春トマト：並 イチゴ：やや少（－） 気象予報：降水量並から多（＋） 日照時間少（＋）	<ul style="list-style-type: none"> <li>気温上昇や降水による多湿によって発病が予想されるため、早期発見に努め、発生初期から薬剤防除する。</li> <li>被害果や被害茎葉は施設外に持ち出し、適切に処分する。</li> </ul>
	灰色かび病	やや多	3月上旬発生量 冬春トマト：並 イチゴ：並 気象予報：降水量並から多（＋） 日照時間少（＋）	
ナシ	黒星病	並	越冬菌密度 秋型病斑発病葉率 ：やや少（－） り病芽率：並 気象予報：降水量並から多（＋）	<ul style="list-style-type: none"> <li>発病芽の除去は極めて重要なので、必ず実施する。</li> <li>りん片脱落期直前から落花後約2週間の防除が重要なので、適期を逃さず防除する。</li> </ul>
果樹共通	果樹カメムシ類	並	1月下旬越冬量：並	<ul style="list-style-type: none"> <li>カメムシ類の発生量は、年次変動が激しく、地域差もあるため、地域の発生情報等も参考にする。</li> </ul>

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
カーネーション	アザミウマ類	並	2月下旬発生量：並 2月黄色粘着板誘殺数：並 気象予報：日照時間少（－）	<ul style="list-style-type: none"> <li>施設内外の雑草や花がらは適切に処分し、ほ場周辺に放置しない。</li> <li>同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。</li> </ul>
	ハダニ類	並	2月下旬発生量：並 気象予報：日照時間少（－）	<ul style="list-style-type: none"> <li>早期発見に努め、発生初期から薬剤防除する。</li> <li>同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。</li> </ul>
野菜・花き共通	コナガ	多	2月下旬発生量 露地ストック：やや多（＋） 3月上旬発生量 春キャベツ：多（＋） 2月フェロモントラップ誘殺数：多（＋） 気象予報：気温高（＋） 降水量並から多（－）	<ul style="list-style-type: none"> <li>早期発見に努め、発生初期に防除する。</li> <li>同系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。</li> <li>平成30年度病害虫発生情報第2号「コナガの発生について」を参考にする。</li> </ul>

## II これから注意を要する病害虫

### 苗箱処理による水稲初中期病害虫の防除

水稲の苗箱処理剤は、省力的で効果も安定していることからイネミズゾウムシ、イネドロオイムシ等の初期害虫の防除に広く利用されている。また近年は、これらより発生の遅い病害虫も防除対象とした、効果の持続性が長い殺虫殺菌剤が多く発売されている。苗箱処理剤は種類が多いので、対象とする病害虫の種類や本田防除の予定などを考慮し、適した薬剤を選定する（表1）。

なお、MBI-D 剤（FRAC コード：16.2）、QoI 剤（FRAC コード：11）は、他県でいもち病耐性菌の発生が報告されている。耐性菌の発生を避けるため、両系統の苗箱処理剤は隔年使用とするか、他の耐性菌リスクの低い薬剤を選択する。また、両系統の薬剤の総使用回数は、育苗、本田を通して年1回とする。

県南部を中心に発生の多いイネクロカメムシは、水田への侵入時期が5月下旬から6月となるので、この時期まで効果の持続するスターダム箱粒剤やデジタルメガフレア箱粒剤が有効である（表2）。

表1 苗箱処理剤の適用範囲及び使用時期（使用回数はいずれも1回）

薬剤名（注1,2）	箱当たり 使用量	使用時期	いもち病	紋枯病	白葉枯病	イネミズゾウムシ	イネドロオイムシ	ヒメトビウンカ	ツマグロヨコバイ
㊦アドマイヤーCR箱粒剤（4A）	50g	は種時（覆土前）～移植当日				○	○	○	○
㊦Dr.オリゼスタークル箱粒剤（P2+4A）	50g	緑化期～移植当日	○		○	○	○	○	○
㊦Dr.オリゼプリンス粒剤6（P2+2B）	50g	緑化期～移植当日	○		○	○	○	○	
㊦Dr.オリゼフェルテラ粒剤（P2+28）	50g	緑化期～移植当日	○			○	○		○
		移植3日前～移植当日			○				
㊦スターダム箱粒剤（4A）	50g	移植3日前～移植当日				○	○	○	
㊦スタウトダントツ箱粒剤（P3+4A）	50g	は種前（床土又は覆土混和）	○		○	○	○	○	○
		は種時（覆土前）～移植当日	○		○	○	○	○	○
㊦ダントツ水溶剤（4A）	200倍 500mL	移植3日前～移植当日						○	○
	200～400倍 500mL					○	○		
㊦ダントツ粒剤（4A）	50g	移植3日前～移植当日				○	○		
㊦ダントツ箱粒剤（4A）	50g	移植3日前～移植当日				○	○	○	○
㊦デジタルコラトップアクタラ箱粒剤（16.1+4A）	50g	移植3日前～移植当日	○			○	○	○	○
デジタルメガフレア箱粒剤（16.1+4A）	50g	移植3日前～移植当日	○			○	○	○	
		移植当日							○
箱いり娘粒剤（P3+7+4A+5）	50g	移植7日前～移植当日	○	○	○	○	○	○	○

薬剤名（注1, 2）	箱当たり 使用量	使用時期	いもち病	紋枯病	白葉枯病	イネミスズウムシ	イネドロオウムシ	ヒメトビウンカ	ツマグロヨコバイ
㊦パダン粒剤4（注3）（14）	50～100g	は種前(床土混和)又は					○		○
	60～100g	移植当日				○			
バリアード箱粒剤（4A）	50g	移植2日前～移植当日				○	○		○
ビルダーアドマイヤー箱粒剤（P2+4A）	50g	移植2日前～移植当日	○			○	○	○	○
㊦ビルダースタークル箱粒剤（P2+4A）	50g	移植3日前～移植当日			○	○	○		
		緑化期～移植当日	○					○	○
ビルダープリンスグレータム粒剤（P2+7+2B）	50g	緑化期～移植当日	○	○				○	
		移植3日前～移植当日			○	○	○		
㊦ビルダープリンス粒剤（P2+2B）	50g	緑化期～移植当日	○				○	○	
		移植3日前～移植当日			○	○			
ブイゲットアドマイヤー粒剤（P3+4A）	50g	移植2日前～移植当日	○		○	○	○	○	○
ブイゲットプリンス粒剤6（P3+2B）	50g	緑化期～移植当日	○		○	○	○	○	
㊦プリンス粒剤（2B）	50g	は種前(床土混和)				○	○	○	
		は種時(覆土前)～移植当日				○	○	○	
㊦フェルテラ箱粒剤（28）	50g	は種前(床土混和)又は				○	○		
		は種時覆土前～移植当日							
		移植当日							○
㊦ルーチンデュオ箱粒剤（P3+28）	50g	は種前	○		○	○	○		○
		は種時覆土前～移植当日	○		○	○	○		○
		移植3日前～移植当日							○
ルーチンブライト箱粒剤（P3+28+7）	50g	は種時覆土前～移植当日	○	○	○	○	○		○
㊦ロングリーチ箱粒剤（P2+4A）	50g	移植3日前～移植当日	○			○	○	○	○

注1) 薬剤名欄の ( ) 内は FRAC, IRAC コードを示す。

注2) 表中に記載した農薬のうち、①登録時のデータから稲わらへの残留性が十分に低いと認められる農薬や稲わらに残留しても牛の乳汁に検出されないことが確認されている農薬、②平成15年度以降に実施したWCS用イネでの残留性試験や乳汁移行試験により残留性がないと確認された農薬に㊦を付した。

注3) パダン粒剤4は、は種前の床土混和处理が可能である。この場合、土壌の種類により育苗期間中に葉害を生じることがあるので、火山灰性の畑土・山土（リン酸吸収係数2,000以上の土壌）及び砂土などの有機物含量の少ない土壌には使用しない。

表2 苗箱処理によるイネクロカメムシの防除薬剤

薬剤名（注1, 2）	箱当たり 使用量	使用時期
㊦アドマイヤーCR箱粒剤（4A）	50g	移植当日
㊦スターダム箱粒剤（4A）	50g	移植当日
㊦デジタルコラトップアクタラ箱粒剤（16.1+4A）	50g	移植当日
デジタルメガフレア箱粒剤（16.1+4A）	50g	移植3日前～移植当日

注1) 薬剤名欄の ( ) 内は IRAC, FRAC コードを示す。

注2) 表1の注2と同様に㊦を付した。

### Ⅲ その他の情報

#### ヒメトビウンカ越冬虫の生息密度及びイネ縞葉枯病ウイルスの保毒状況

平成 30 年 11 月に、27 地点でヒメトビウンカ越冬虫を捕獲し、イネ縞葉枯病ウイルスの保毒検定を行ったところ、平均保毒虫率は 4.1% で前年よりやや上昇した（表）。東葛飾地域の平均保毒虫率は 6.0% で、再生株での縞葉枯病発病株率も 5.2% と高かった。更に山武地域では、38.0% と保毒虫率の高い調査地点があった。また、平成 31 年 2 月に病害虫防除課巡回ほ場（県内 70 地点）畦畔等で、イネ縞葉枯病ウイルスの媒介昆虫であるヒメトビウンカ越冬虫の生息密度を調査したところ、3 m<sup>2</sup>中に 4.6 頭（平年値 1.6 頭）と、過去 11 年中最も多かった（図）。特に香取、海匝、夷隅地域で例年より多く捕獲された。保毒虫率や生息密度の高い地域は、被害発生に注意が必要である。

ヒメトビウンカは、移植時にウンカ類に登録のある苗箱処理剤を使用して本田に飛来する成虫を防除する。また、飛来成虫及び本田で発生する次世代幼虫を対象に、5 月下旬から 6 月中旬までに本田防除を実施する。

イネ縞葉枯病は感染時期が早いほど減収被害を受けやすく、本田防除時期が遅れると十分な防除効果が得られないので注意する。

表 地域別ヒメトビウンカ越冬虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率（11 月調査）

地 域	平均保毒虫率 (%) (調査地点数)		最高保毒虫率 * (%)		再生株発病株率 ** (%)
	H29	H30	H29	H30	H30
千 葉	1.9 (3)	3.1 (3)	4.1	3.7	0.4
東葛飾	4.8 (4)	6.0 (4)	12.0	9.8	5.2
印 旛	3.5 (4)	1.6 (2)	6.5	2.2	0.4
香 取	2.6 (2)	4.0 (3)	5.2	8.7	0.7
海 匝	1.1 (2)	2.7 (2)	2.1	3.3	0.0
山 武	5.5 (3)	13.4 (3)	15.3	38.0	0.4
長 生	3.7 (3)	3.3 (3)	7.6	5.4	0.7
夷 隅	4.4 (2)	1.1 (3)	8.8	2.2	0.2
安 房	6.4 (2)	2.7 (2)	8.1	4.4	0.0
君 津	2.2 (2)	3.3 (2)	4.3	4.4	0.0
全 県	3.6 (27)	4.1 (27)	15.3	38.0	0.8

捕獲場所：水田内のイネ再生株 検定方法：簡易 ELISA 法

\* 地域で最も保毒虫率が高かった調査地点の値

\*\* イネ再生株の縞葉枯病発生株率（県内 68 地点、平成 30 年 10 月調査）

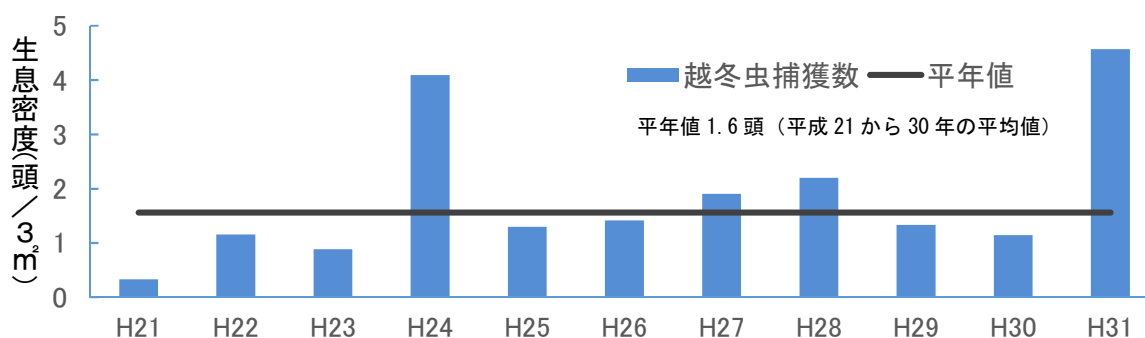


図 ヒメトビウンカ越冬虫生息密度の年次推移（2月調査）

## 参考資料

### ○主要病害虫の発生状況

巡回調査結果（水稲：2月，野菜：3月上旬，果樹：2月，花き：2月下旬）

作物名（調査地域）	病害虫名	調査項目	調査結果			備考
			本年値	平年値	前年値	
イネ（県内全域）	イネミズゾウムシ	畦畔0.25m越冬成虫数	0.09	2.06	2.28	前年6月調査 "
	イネゾウムシ	畦畔0.25m越冬成虫数	0.20	0.30	0.19	
	イネクロカメムシ	畦畔0.25m越冬成虫数	0.04	0.12	0.01	
	ヒメトビウンカ	畦畔3m吸い取り成幼虫数	4.60	1.57	1.14	
	ツマグロヨコバイ	畦畔3m吸い取り成幼虫数	4.24	1.83	0.39	
	スクミリンゴガイ	貝密度（/m <sup>2</sup> ）	0.13	0.14	0.13	
		被害株率（%）	1.7	0.3	0.6	
冬春トマト （海匠，長生，君津）	萎凋症	萎凋株率（%）	0.33	0.35	0.27	
	うどんこ病	発病株率（%）	1.53	1.83	3.73	
	灰色かび病	発病株率（%）	10.60	11.15	6.13	
		果実発病度	0.73	2.55	0.33	
	葉かび病	発病株率（%）	0.00	4.96	0.00	
	モザイク病	発病株率（%）	0.00	0.00	0.00	
	黄化葉巻病	発病株率（%）	0.00	1.33	0.00	
	オンシツコナジラミ	成虫寄生株率（%）	0.67	0.91	0.53	
	タバココナジラミ	成虫寄生株率（%）	0.33	0.37	0.00	
	ハモグリバエ類	幼虫寄生株率（%）	0.00	0.64	0.00	
	アザミウマ類	成幼虫寄生株率（%）	0.00	0.00	0.00	
春キャベツ（海匠）	菌核病	発病株率（%）	1.60	0.88	0.00	
	黒腐病	発病度	0.00	0.02	0.00	
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率（%）	0.00	0.32	0.00	
	コナガ	25株当たり寄生幼虫蛹数	3.20	0.12	0.00	
イチゴ （海匠，山武，安房）	うどんこ病	発病株率（%）	0.80	2.35	1.30	
		発病果率（%）	0.00	0.13	0.00	
	灰色かび病	発病株率（%）	1.11	2.27	0.87	
		発病果率（%）	0.10	0.29	0.07	
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率（%）	6.67	2.95	2.66	
		黄色粘着板誘殺数	14.22	2.76	4.89	
	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率（%）	0.00	0.00	0.00	
	アザミウマ類	成幼虫寄生株率（%）	2.00	0.10	0.19	
		黄色粘着板誘殺数	4.17	7.70	0.07	
	雌成虫寄生株率（%）	34.67	29.80	51.40		
ナシ（県内全域）	黒星病（秋型病斑）	発病率（%）	0.97	3.75	1.53	前年10月調査 注1
	黒星病	り病芽率（%）	0.73	2.05	2.85	
	輪紋病	発病度	0.01	0.02	0.09	
	卵越冬ハダニ類	産卵数	0.00	0.41	3.50	
	ナシチビガ	越冬蛹数	0.00	0.01	0.00	
果樹共通（県内全域）	チャバネアオカメムシ	越冬成虫数（頭/3m <sup>2</sup> ）	0.93	1.57	2.61	注2
カーネーション （安房）	萎凋病	発病株率（%）	0.00	0.84	0.80	
	立枯病	発病株率（%）	0.00	1.14	1.60	
	アブラムシ類	成幼虫寄生株率（%）	0.00	0.10	0.00	
	アザミウマ類	被害株率（%）	12.00	9.78	21.60	
		黄色粘着板誘殺数	0.80	2.65	3.40	
	ヨトウムシ類	被害株率（%）	0.00	0.00	0.00	
ストック（安房）	コナガ（露地）	被害株率（%）	33.33	16.00	19.20	
	アブラムシ類（露地）	成幼虫寄生株率（%）	2.67	2.29	0.00	

注1：調査が完了していないほ場があるため，数字は今後変わる可能性がある

注2：果樹共通（チャバネアオカメムシ）の調査は12月～1月

### トラップ月間誘殺数（2月）

種類	病害虫名	トラップ設置場所	誘殺数（頭）			備考
			本年値	平年値	前年値	
性フェロモン	コナガ	海匠，安房	12.7	4.4	7.8	

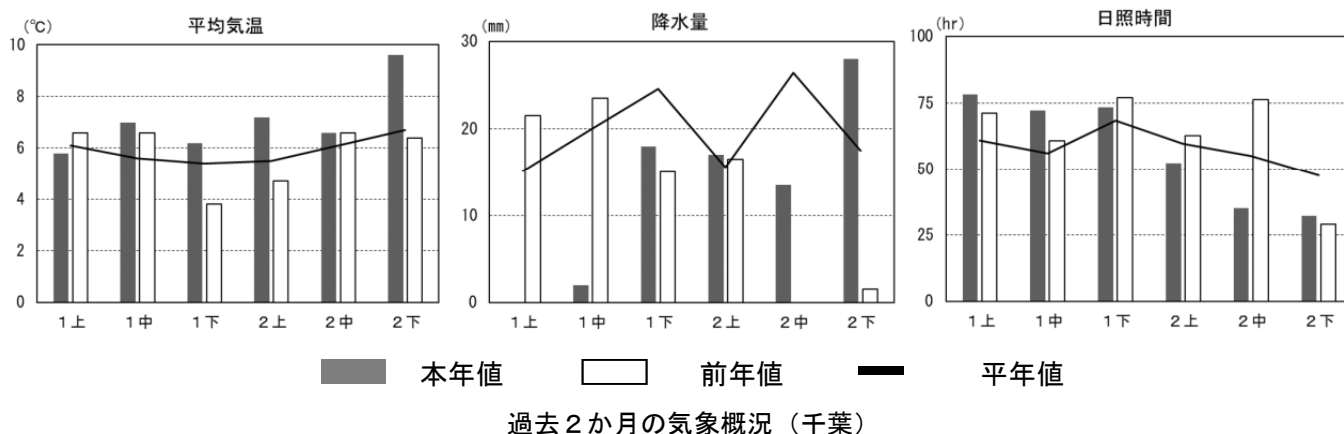
## ○気象予報

2月28日気象庁地球環境・海洋部発表  
関東甲信地方における向こう1か月間の確率(%)

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	10	20	70
降水量	20	40	40
日照時間	50	30	20

向こう1か月間の各気象要素の平年値  
(3月7～4月6日銚子地方気象台資料)

要素	千葉	銚子	館山
気温(°C)	9.8	9.9	10.4
降水量(mm)	112.4	154.7	168.8
日照時間(hr)	164.4	165.5	157.9



### 農薬は適正に使用しましょう。無登録農薬の使用はできません。

- 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍数、収穫前日数、総使用回数などが定められています。
- 登録番号のない薬剤は、農薬として使用できません。登録農薬には必ず登録番号が記載されています(記載例 農林水産省登録第〇〇〇号)。
- 農薬はラベルをよく読んで適正に使用しましょう。
- 飛散しないよう工夫して散布しましょう。
- 農薬を散布したら必ず記帳するようにしましょう。
- タンクやホースは洗いもれがないようきれいに洗っておきましょう。

・病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/>

・次回の発行予定は4月17日です。なお、注意報等の臨時情報は、逐次発行されます。

・薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。

[https://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](https://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)

問い合わせ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0006 千葉市緑区大膳野町 804

TEL 043(291)6077 FAX 043(226)9107

E-mail [cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp](mailto:cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp)